

張南軒初年の思想：胡氏湖南学の受容

福田， 殖

<https://doi.org/10.15017/18038>

出版情報：中国哲学論集．2， pp.24-41， 1976-10-01．九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

張南軒初年の思想 — 胡氏湖南学の受容 —

福 田 殖

(一)

南軒①初年の思想を端的に表すもの一つに「潭州重修嶽麓書院記」（南軒文集一〇）がある。この中で南軒は、古先王の道を継承する孔孟の中心概念である仁の本体を体得しようと思えば、日常行動の中にあらわれる仁の端緒を默識して存し、拡充して達していくべきである、とした。これは「端倪（端緒）を察識して、然る後に涵養する」という胡氏湖南学の学問的方法論を純粹に継承するものである。更に別の観点から考察すると、仁の本体の体得を優先的に志向する点において、陸象山の求心的に本源、本根をきわめる心学的方法論にやや近似するものであろう。朱子が南軒初年の思想を批判して

南軒初年の説には、いささか彼（象山）に似ている点がある。たとえば嶽麓書院記では、次のように述べている。（『孟子』の中で梁の襄王が）牛を愛しんだ場合（の心）、赤子が井戸におちこもうと（しているのを見て、

惻隱の心をおこ）した場合（の心）、それがつまり真心②である。もしもこのような心を理会することができたらば、全くそれで十分なのである、と。後（年）の（彼の）説は、このようではない」（朱子語類一二四、陸氏、葉賀孫録）

というのも、その点を指摘したものと見えよう。たしかに南軒は「金石の友」③朱子と「十余年間書問往来」④した結果、晩年には、ほぼ朱子に同調していった。「蓋し繳紛往反することほとんど十余年、末は乃ち同帰にして一致」⑤とは朱子の有名なことばである。しかしながら南軒は四十八歳という中寿にて歿する。歿前の数年間は、広西、湖北の地方官僚として政治実践に多忙をきわめたため、南軒の学問は、同帰一致後の飛躍開花をみるには至らなかった。朱子は後年、よき講友で、共に早逝した呂東来と張南軒のことを追想して、

伯恭、欽夫の二人、もし今に至るまで死せざれば、大段光明あらん（朱子語類三一）といっている。また朱子と論敵の間柄であった陸象山も、南軒に期待するところ大であつたらしく、淳熙七年、南軒死去の訃報に接するや、「吾が道、助けを失なうこと細ならず⑥」と嘆いている。性即理説の立場の朱子、心即理説に立つ象山は終生対立して譲らなかつたが、両者共に南軒に期待しかつその死を惜しんでいる。それは、共に義理心性の究明を第一義とする道の哲学の立場に立っていたからであろう。その点で朱陸共に十一世紀北宋期以来の宋学の主流の中に位置づけることができる。象山は程明道の一元的な心性論を純化していった謝上蔡、王震沢、張横浦、林艾軒の系統に属し、心即理説を主張して、動的な生命の哲学を完成させた。一方朱子は、程伊川の二元的な心性論、主知的分析的で理意識を強調する立場を主として継承し、また楊龜山・羅予章・李延平と流れる静の哲学をもあわせて包摂し、性即理説を根幹とする静的な理性主義的哲学を構築した。この二つの流れを目安にすると南軒は、はじめは、心を主として動的傾向の強い胡氏湖南学の影響を受けて、若干象山に相似た行き方を示し、後には、朱子との講論討求を通して、朱子に同調していったと見ることもできよう。

胡氏湖南学は、北宋末期から南宋初頭の激動期に生き、程門の楊龜山、謝上蔡、遊廬山等と師友の交わりをなし、遂には程子に私淑して湖南学を開いた胡安国にはじまり、胡致堂、胡五峯兄弟に伝わったものである。南軒の師、胡五峯も楊龜山、侯仲良に師事したが、結局、父安国の学を継いだ。胡氏湖南学も、その源流は、宋学本流である程子の学である。五峯の弟子である南軒が「某は、程子の門に学ぶ者なり⑦」という自覚を明確に表明しているのも、そのことを裏づける。南軒初年の思想形成に大いにあづかって力あったのが、程子の学を根幹にして独自の哲学⑧を説いた胡氏湖南学なのである。

(二)

南軒が真の意味で、聖人の学を志向するのは、胡五峯に師事してからであるといつてよからう。もつとも聖人の学志向は、十世紀後半の宋初以来、宋学の大切な学問的基盤となつたものである。周濂溪が『通書』志学章、聖学章⑨の中で述べているのは、その簡潔な要約的表現であろう。しかし、宋初にすでにそういう機運がなかつたわけではな

い。たとえば五代の戦乱をつぶさに経験した隠者、陳搏、种放等は、単なる仙人志向の隱逸者ではなく、黄白の仙術よりも経世済民の儒術、愛民の治政を重視したこと、すでに論じられている通りである⑩。より明確な形で出てくるのは、いわゆる宋初の三先生とよばれ、宋代理学の先駆者と称された、胡瑗、孫復、石介⑪あたりであろう。彼等は聖賢を期し、正学を主張した。周濂溪にやや先行する思想家達である。

ところで南軒も、五峯に学ぶ前に、父、張浚自らの手による教育を受けていて、この点も見逃せない。張浚は同時代に活躍した武人張俊とは別人で、武のみでなく、文にもすぐれた人物であった。張浚は若き頃、程子の門人で易学に深かった謙定について問学し、聖人の学を志向した程子再伝の学者でもあった。彼は同じく程子再伝の学者であった趙鼎や、胡安国の子で、朱子から豪傑の士と評された胡致堂等と親交をもっていたこと等を考えると、南軒が育った環境には早くから程子の学が濃い影をおとしていたことに気がつく。

朱子再伝の学者、羅大経は、次のような話を伝えている。

高宗かつて張魏公に問う、卿が児、想ふに甚だ長成せん、と。魏公こたえて曰く、

臣が子、栻、年十四、脱然として、ともに聖人の道を語るべし⑫、と。

と述べていることによっても、更にまた張浚自身諸子門人への教訓として

曰く、学は礼を以て本となす。礼は敬を以て先となすと。また曰く、学者まさにその心を清明にし、聖賢の氣象を默存すべし。久久にして自ら見る処あらん、と⑬。

と述べていることなどによっても、張浚の立場は、基本的には、程子の学を根底にする聖人の学を志向するものであったことは明らかである。ところで注意すべきは、張浚には禅学への傾倒がみられることで、同じく聖人の学といたっても、異端としての仏学を批判することが、道の哲学の昌明に同時に連繫していた南軒の師、五峯のように一意尊信のものではなかった点である。張浚行状を書いた朱子は、あの長編の文章の中で、そのことについては、遂に一言も触れていない。しかし張浚が当時の臨濟禅の傑僧、大慧宗杲と晩年まで道交をもった人物であったことは、大慧書や大慧年譜に徴してみると明らかであって、宋元学案では趙鼎と共に程子の学を南宋に隆にした功績は認めつつも、そうした点を次のように指摘する。

中興の二相、豊国趙公、かつて邵子文に従って遊ぶ。魏国張公は、かつて謙天授に従って遊ぶ。豊公の得る所は浅くして、魏公は則ち禪宗に感う。然れども伊洛の学、これより昌んとなる^⑩。

たしかに宋初の三先生が、正統意識に立って、異端と考えられた仏教老莊をきびしく攻撃し、ややおくれて程子が仏老の害は楊墨の害より甚だしいとして正統と異端をきびしく弁別した態度は、張浚には見られない。一つには、大慧宗杲という傑僧の感化力もあつたことであろうが、もう一方では、当時の思想界では、二程の高弟である楊龜山、謝上蔡、遊鷲山等もひとしく染禪の状況にあり、胡氏湖南学の初祖、胡安国も壮年まで仏書に親しんだという風潮から観ると、むしろ、宋代士人の心に深く刻みこまれた禪学のおそるべき魅力をこそ問題にすべきであるかも知れない。

こうした思想界の一般的風潮に対して、聖学の旗幟を鮮明にし、ほとんど孤立無援に近い状況で仏教を排斥し、正統と異端の弁別を顕らかにしたのは、胡氏家学をついだ胡致堂、胡五峯であった。

五峯に従学するまで、父、張浚の家庭教育以外に南軒はなお、二人の師に従事している。紹興十六年から二十年にかけて、張浚は連州（広東）に謫居するが、この期間（南軒十四歳から十八歳）、趙鼎の門人で、当時、知連州であった王大宝に師事、更に紹興二十年九月、永州（湖南）に移ってからは、南軒は、弟杓とともに、孫偉の門人、劉芮に師事している。趙鼎は、程子の門人の邵伯温に師事した学者でまた政治家でもあり、浚とも親しかった。劉芮は、司馬光の門人、孫偉に師事したが、また程門の尹和靖、程子私淑の胡安国にも学んだ学者である。しかし本質的には劉氏家学を守った人で、北宋の劉摯の曾孫、劉岐の孫にあたる。劉摯は神宗に上疏して、君子小人の分は義利に在りとして、王安石を批判したが、このように義利の分をきびしくいう考え方は、劉氏家学として劉芮まで伝っていたであろう。劉芮も、言行の一致と不一致とをもって君子と小人とを弁別し、道を志して、古道を守る人であった。劉芮のこのような道の哲学の系統に属する学風は、ほゞ二十歳前後から二十代前半の南軒に強い影響を与えたであろう。張浚は劉芮に南軒兄弟を厳事させている。会う前に書問往来があったとはいえ、南軒が五峯に会うや、語甚だ契合し、聖門に人ありとまで五峯に期待されるまでになるには、それなりの学問がすでにできていたとも解されよう。

胡五峯は、前述のようにはじめ程門の楊龜山、侯仲良に従学したが、結局、父安国の学を継承して純化し、安国よりさらに程子の学に近づいた者だったといえる。特に宋の南渡後、紹興年間に程子の学を深得した者が相次いで没したからの、五峯の思想的役割は見落してはなるまい。宋元学案にいう「南渡、洛学を昌明するの功は、文定ほとんど龜山にひとし。蓋し晦翁、南軒、東萊、皆その再伝なり」と。楊龜山は紹興五年に、胡安国は同八年に、そして、洛学最晩出にして、その師説を守ること、もつとも醇と称せられた尹和靖は同十二年に歿している。文字どおり孤軍奮闘して、程子の学を五峯は確守することに使命感をもった道の哲学者であったといえよう。この間のいきさつを五峯は次のように述べている。

方今聖学衰微し、士風卑陋なり。ともに仁をなすべき者極めて少なし。真に力を積むこと久しく、名世の大賢作ちてこれを振はすを得るにあらざるよりは、則ち人道何に由りてか立たん。然れども河南の門に遊びて、その指帰を得し者、零落して殆んど尽く。

斯文寥落すること久し。我蒼天に問はんと欲するも、蒼天は黙して言ふ無し。復た古先に問はんと欲するも、古先群聖人、我を去ること三千年。紛紛たる儒林の士、章句を以て賢と為す。これに性、命、理を問へば、醉夢俱に茫然たり。皓月は重なれる雲に隠れ、明珠は深き淵に媚びたり。近ごろ程夫子を得たり。一綫、天泉に通じ、蕩滌して塵垢を淨む。

このような聖学志向、程子学への傾倒は、龜山、仲良という程門の学者の影響もさることながら、本質的には胡氏家学の伝統といえよう。

胡安国は普通、春秋胡氏伝の作者として有名である。それは宋、元、明と長く人士に読まれたことにもよるが、またそれが安国の思想の中心に位するからでもある。胡氏伝は、安国が三十歳ごろ、つまり徽宗即位後あまり経過しない崇寧二年ごろから研究に着手して、およそ三十年程経過した紹興四年、安国六十一歳の時に完成した學生の著作であり、自己の学問の投影でもあった。この間安国五十三歳の時に靖康の変がおこっている。また紹興元年、安国が給事

中兼侍講の時、高宗に春秋を進講し、南面の術ごとくここにありと言った。

春秋胡氏伝は、靖康の変をきっかけとして南渡した当時の宋の時勢（金、宋間の国際的緊張状況）に感奮慷慨して書かれたものだから問題がある、とする論がある¹⁸。復讐が強調され、きびしい道徳主義で貫かれている点は特異なものといえようし、あるいは、経旨に合わず、牽強のところがあるという指摘もわからぬでもないが、しかし、胡氏伝は後述するごとく、安国一代の学問精神の産物とみるべきではなからうか。

「聖学とは心を正すことを要とする。心は事物の宗（根源）。心を正すことは、事を揆り物を宰どるの権なり¹⁹」と考える安国にとって、春秋は、昔も今も変りようがない人間の良心を伝える重要な經典なのである。したがって、万事万物の主宰探度である心を軸にして、えらびとられた經典が春秋であった。要するに春秋胡氏伝は千古不磨の心を正し、義理の厳正を主眼として、書かれたものであり、尊王の大義、名分思想、天理と人欲、華夷の弁、復讐説等が説かれている。

また、春秋胡氏伝が長い研究の結果、でき上った学問的な著作であることは、彼自身が明らかにしている。

某初めて春秋を学ぶや、功を用ふること十年。徧く諸家を覽、博く取りて以て要妙を会せんと欲求す。然れども、但だその糟粕を得るのみ。また十年、時に省発あり。遂に衆伝を集めて附するに己が説を以てす。猶ほ未だ取へて以て得ると為さざるなり。また五年、去る者或は取り、取る者或は去る。己が説の心に不可なる者も、尚ほ多くこれあり。また五年にして書成る。旧説の存することを得る者は寡し。この二年に及び、習する所益々察らかなるに似、造る所益々深きに似たり。乃ち知る聖人の旨益々窮り無きを。信に言論の能く尽くす所にあらざるなり²⁰。

さらに春秋学研究の動機も、王安石が断爛の朝報と春秋を貶して以来、崇寧の頃（安国三十歳前後）まで防禁されて読んできたことを歎じ、経世の心を明らかにするといふ儒家的立場から発しており、更に春秋学研究と相前後して、それまで読んでいた仏書を屏絶し、聖門の学に潜心したという²¹。

安国にとって「春秋は伝心の要典、春秋を学ぶことは、窮理の要²²」であり、「世に先後はあっても、人心の所同然は一つであり、いやしくも所同然を得る者は、宇宙（時間と空間）を越えて聖人に会い親炙するようなもので、春秋の権度は我にある²³」のであった。

楠本正繼博士は「春秋胡氏伝の思想は、人の心の功夫を尊ぶが、同時に義理に運命をかける厳肅な道德主義の立場」であり、「伊川の理と上蔡の心の思想に関連をもったのが安国の春秋思想である」と述べられたが、安国は後述のように本質的には程子の理意識を強調する学に立つが、程門の高弟、楊龜山、謝上蔡、遊麴山にも交わったため、それぞれ影響を受けた。なかでも楊遊より謝上蔡を喜び、謝上蔡の心をたつとぶ思想は安国に伝わっていたのである。また安国の春秋学は兄、致堂の読史管見、弟、五峯の皇王大紀へと継承されていた。これらについてはすでに詳しく論じられている。

ところで宋元学案によれば、胡致堂の斐然集の先公行状に「元祐盛際（安国十代の後半）、師儒賢彦多し。公の從遊する所の者は、伊川程先生の友、朱長文及び穎川の斬裁之なり」とある文章をあげて、「朱楽圃は、（孫）泰山の春秋の伝を得ている（人である）ので、先生（安国）は泰山の再伝の弟子であることがわかる。（安国の）春秋の学によって出る所である」という。たしかに従来の春秋解釈（たとえば左伝）のように計較利害（功利思想）をもってするのではなくて、大義の上に立つ孫泰山の春秋尊王發微の思想は胡安国に伝わったであろう。しかし春秋胡氏伝は、いわゆる春秋の三伝ほか先人の春秋解を時に取捨考察しながらもなお、その基本は遠くは孟子、近くは程氏によっている。胡氏伝の巻頭「叙伝授」では、「大綱は孟子に本づいて、微詞多くは程子の説を以て証と為す」という。たしかに安国三十年の春秋学研鑽の中で、程伊川の伝（完本でなく、部分）を手に入れて、その間の精義十余条、符節を合するがごときを知り、自信を深めたというあたりは、程子私淑の学者安国の面目がよくあらわれている。

宋学の大成者、朱子も春秋については伝を書かなかつた。それは胡氏伝に対して部分的には不満をもったが、全体としては認めただからである。かくして、元の延祐二年、科挙試に三伝と共に採用されて、始めて学官に立てられ、元、明を通じて広く読まれた。

(四)

胡安国の蔡京に対する、胡致堂、胡五峯の秦桧に対する態度等をみると、道義にもとづききびしい立場が、彼等の生き方の根本をなしていることがわかる。こうした態度は、安国が親交をもった秦桧を致堂、五峯ともに峻拒する（

両者に硬軟の差はあるが、に至るところから考えると、強められこそすれ、弱められることはなかったようである。今、致堂の書いた先公行状にしたがえば、胡安国の性格は本来剛急であり善悪のけじめがきびしく、出処進退は道義に依拠し、辞受取捨において一介の微も必ず義に度ったという²⁸。謝上蔡の「胡康侯は正に大冬の嚴雪に百艸萎死して松柏挺然として独り秀ずるが如きなり²⁹」という安国評、当時の御史中丞、許翰が「蔡京に籠絡されなかったのは安国一人のみ」と評した言葉を読むと、現実政治の権力から超然として独立し、聖学を志向して生きた道の哲学者の風貌がうかがえる。しかしそのためか、紹聖四年（二十四歳）進士に合格して退職するまでのおよそ四十年間に実職にある日は、六年にも満たず、しばしば罪を以て去るのやむなきに至っている。

はじめは蔡京に憎まれて無理に官職を罷めさせられて荆門漳水のほとりに退居、中ごろは、門下侍郎の耿南仲、中書侍郎の何臬、宰相の唐恪等と合わず、中書舍人から地方官に左遷されている。終りは、給事中兼侍講であった時、朱勝非を批判したことに端を発し、左相呂頤浩が右相秦桧を傾げんとして、朱勝非と結托し、ために安国は落職して朝廷を追われ、奉祠職に就かしめられた（この時、秦桧は三たび上章して安国を朝廷に留めんことを乞うたが、報なく、ために秦桧は、相印を解いて位を去っている。）この後、安国は衡嶽のふもとに書堂を営み、春秋胡氏伝を完成して高宗に進上、高宗からは称賛されたが、一方御史中丞の周秘、侍御史の石公揆、司諫の陳公輔等から、安国は學術頗る僻より、行義修らずと論難されている³⁰。（陳公輔は紹興六年、伊川の学は天下を惑乱するものとして屏絶せんことを乞奏した人である³¹。）

かかる安国も秦桧と親交をもったことを誤交として後世議せられている。子の致堂、五峯も秦桧を固くこばんだ。これらについて朱子は、抗戦派から講和派に思想転向をする以前の秦桧に親交をもった点に注目し、秦桧が後に大疎脱をなすに至った時には、安国はすでに歿していたと、同情的見方をしている³²。明の楊廉によると、秦桧は朱子のいうように士大夫の小人で、易の有名な文句「敬以て内を直くし、義以て外を方にする」（坤卦文言伝）のうち、上句は実行できるが、下句は実行できないと言ったという³³。しからは義理の究明を第一とする安国と当然齟齬をきたす筈であると考えられるのだが、安国にして秦檜³⁴の人物を見抜けなかったということは、人を識ることのむづかしさを物語るのであらうか。

胡五峯は極力秦桧を避けた。秦桧宛の書簡^㉞を読むと、嶽麓書院の山長を希望して、秦桧の勧誘を婉曲に断っている^㉟。そのため秦桧が政権を独占する紹興年間には、儒家的経世の志は実行できず、衡山のふもとの文定書屋で講学にはげんだ。しかし胡五峯の真意は決して超世隱遁にはなかつた^㊱。常に有用の学を内にはらむものであって、程子、安国以来の体用の思想がそこに流れているといえよう。

五峯によれば「聖人の道を学ぶには、その体を得れば、必ずその用あり。体ありて用無ければ、異端と何をか弁せん。井田、封建、学校、軍制は皆聖人心思を竭くして用を致すの大なる者なり。」（五峯集卷二、与張敬夫書）とし、聖学の第一条件として「学には必ず物の理を窮極するを以て先と為すなり」（同上）とし、その方法論として「道の学は博学審問慎思明弁を用いるを須ちて、然る後力行すれば則ち差はざるのみ」（同卷二、与孫正孺書）という。

何故に五峯は体用の相即を説くか、といえば、それは一つには当時多くの士人が仏教にひかれて、伝統的な道の哲学（聖学）が衰微していたからであった。それは上は天子、宰相から一般人士、五峯をとりまく周辺にまで及んでいる風潮でさえあった。たとえば前述の敬内（体）は可能だが、義外（用）は不可能だとした秦桧も仏教信者であり、高宗も同じく仏教の信奉者であった。五峯は高宗にたてまつる上奏文の中で、哲学論議からよりも、むしろ具体的現象面から仏教が国家利害に重大な関わりがあることを強調したが、そこに五峯の苦心のあとをみる。また同じく胡氏家学に属する胡籍溪の仏教信奉の態度についても、これをきびしく戒めている。五峯によると、

仏教は日用常行を幻妄粗述として（儒家のいう）窮理尽性を知らず、天地人生を幻化として天性に本づいて千古不磨の心を妄想粗述とし、物（用）を離れて道（体）を談ろうとする。また出家、出身を事として天倫を絶滅し、人理を屏棄する態度は邪説暴行の大なるものである。天性に根源をもつ心と事迹とは判けられないもので、天人は不二、下学（用）上達（体）は一貫すべきで離れるのは道ではない。天にもとづく五典五常に立脚しない仏教は性命を毀ち典則を滅するものであり、事障、理障を説き心地法門を談ずる仏教は自私なるものである。（五峯集二、与

原仲兄書取意）

と述べている。仏教を義利公私、經世出世の観点から批判し、また当時の士人³⁸が儒と仏を本同末異とする点をしりぞけ、大本同じからざるが故に末も異なると本末不同説をとっている。このような考え方は、程子、安国を経て五峯に伝ったもので、更に南軒に伝わっていったものである。義利公私、經世出世で儒釈を弁じたのは陸象山であるが（象山全集二、与王順伯書参照）朱子は儒釈を実と虚で弁別し、更に一步つっこんで（朱子語類一二六参照）。体用相即を説く五峯は何を体用と考えたか。

聖人は仁以て体となし、義以て用となし、時とともに変化し、施して可ならざるは無し。聖人を学ぶ者は仁を以て心を存し、義を以て物に処し、時をみて動き、亦あに進退を必とせんや³⁹（五峯集二、上光堯皇帝書）

五峯にとって「時の古今は、道の古今」（胡子知言一、陰陽）であった。

五峯は「道は体用の総名。仁はその体、義はその用、体と用とを合して道となる」（胡子知言一、陰陽）と説いたが、一方「学業はすべからく本根を見るべし」（五峯集一、別吳衛道詩）「聖人の法は常に本をただし源を清くするに在り。あに本源を舍いて末流に就くべけんや」（同三、与彪德美書）と本根、本源を重要視する考え方も示し、体と用は一貫しつそこに価値的な差も認めているのである。たとえば、木は根本と枝葉から成り、木として一貫しているが、大切なのは根本であるというのである。ここに五峯の求仁説（五峯集三）の真意があり⁴⁰、南軒が仁の本体を察識しようとする考えにつながる。

(六)

南軒は五峯の晩年の弟子である。五峯が南軒に教えたものは何であったか。要約すれば次のごとくである。「仁の道は大、須らく大なる体を見るべし。然る後に己の偏を察して、正に習すべし。乍ち孺子の井に入るを見るの時、孟子一隅を挙ぐるのみ。……子文の忠、文子の清のごとくして而も仁となすを得ざれば則ち識りがたきなり」（五峯集二、与張敬夫書）「仁の義は黙識すべし」（同上）「仁なる者は人の天たる所以なり。須らく天理を明かにし得尽くすべし。然る后克己以てこれを終ふ」（同上）「聖人の道を学ぶには、その体を得れば必ずその用を得。体ありて用無ければ、異端と何をか弁ぜん。井田、封建、学校、軍制、皆聖人心思を竭して用を致すの大なる者なり」（同上）

「聖人は天理に因り、人情に合す」(同上)。「夫れ理窮まらざれば則ち物情尽きず。……故に学は必ず物理を窮極するを以て先となすなり。……実弟必ず敬以てこれを持し高明博厚、日に無疆に進めば、聖門に人あらん」(同上)。「万理一以てこれを貫く。直ちに寂然不動の地に造り、然る后吉凶民と患を同じうし、天の為す所を為す。これ聖門の事業なり」(同上)

五峯はここで「察識端倪、然後涵養」という求仁の方法論、天理人欲論、体用相即思想(井田、封建等経済の学にも意を用うべき必要性を強調。南軒門下に経済の学にすぐれた者が出たのも偶然ではない。)物の理の究明、敬の工夫、理一分殊説等について教示し、若い南軒に期待した。前述の嶽麓書院記は南軒三十四歳の作であるが、五峯のこうした教えを忠実に継承したものと見えよう^④。

南軒は二十九歳(紹興三十二年)の時、初めて五峯に会うことができたが、五峯は半年後五十七歳で歿した。それ以前に書問往来があつたことは希顔録が二十七歳の時の作であるのを見ても明らかである。希顔録編集の意図は、五峯に呈して聖学志向を明かにするところにあつたように思われる^⑤。

南軒は三十一歳(隆興元年)の時、孝宗に対面したが、その時、孝宗の讐恥を念じ中原の塗炭をうれえて心中におこった憾惻隱の心を、「この心の発即ち天理なり」と述べた、(誠齋集百十五、張左司伝)という。三十八歳(乾道六年)侍講を兼務した時の講義においても、「天下の飢寒を思うこと、己が飢寒のごとくする、この心常に存すれば則ち驕矜放肆、何によりてか生ぜん。あに治の由りて興る所にあらずや」(南軒文集八、経筵講義)と述べている。ともに孝宗に対して述べられたことばである。これらは、一念発動する己発の瞬間に天理を直覚しようとする、心を主として動的傾向の強い胡氏湖南学の考え方によるものである。

前述の嶽麓書院記でも、仁の端緒が日常行動(動的状況)の中にあらわれるので、黙識してこれを存し、拡充して達して、生生の妙が、心中にわき起れば、仁の大いなる本体は体得できるとする。ここでも、仁は人心であるとして、動処にとらえようとする。三十五歳の時の経世紀年序では、古今、万変も結局一息、一原に帰するのであり「蓋し義理は天命に根ざして人心に存する者にして没すべからざるなり。この故に易は太極に本づき、春秋は元を書して以てその体用を著す」(同十四)と述べる。端本清源的な体用相即をたつとぶ胡氏湖南学の継承である。

三十六歳の時に書かれた胡氏知言序^④の中で、

太極精微の蘊を折し、皇王制作の端を窮め、事物を一元に統べ、古今を一息に貫き、人欲の偏を指して以て天理の全きを見、形而下なる者に即して無声無臭の妙を発す。学ぶ者をして端倪の遠かざるを験して、高深の無極に造らしむ。体用該備はりて、挙げて行うなり。……学ぶ者誠に能くその言に因りて、視聽言動の間に精察し、卓然としてかの心の妙なる所以を知れば、則ち性命の理、蓋し黙識すべくして、先生の意、古人に異ならざる所以の者もまた得て言うべきなり。(同十四)

と述べ、五峯の学問の特色を端的に記している。(しかし三十九歳の時から朱子や呂東萊と胡氏知言について心性論、天理人欲論などの疑義について討論^⑤、やがて朱子に同調していく^⑥。)

同じ三十六歳に敬齋銘が書かれている。この中で「敬は心を宅するの要」(卷三六)とし、「事物を忽がせにするなく、必ず吾が思を精にせよ。その発する所を察して、以て微を会せよ」(同上)という。心を存するかなめとして敬を説き、察識端倪、然後涵養の胡氏湖南学の方法論である。同年、南軒は孟子講義序を書いたが、この中では主として義利の弁別を論じ、「聖学は為めにする所無くして然るなり^⑦」(同十四)という。義利の弁別は安国、五峯と伝えられた宋学本流の考え方であり、「無所為而然也」とは、五峯の「有為の為は智巧に出ず。無為の為は仁義に本づく」(胡子知言二好悪)をふまえていることは明らかである。

要するに南軒初年の思想は五峯に師事して胡氏湖南学のもつ、静をきらって、動処に天理を直覚し、そこに動静体用未己発の融合をはかろうとする、いわば動時の省察に力点をおく思想を継承し、純化したものといえよう。南軒はいう「聖賢端的の意を識ろうと思えば、須く動処に於いて天機を見るべし^⑧」と。またいう「ああ道は二、義と利とのみ。……念慮の起こる時、必ずその義たるか、利たるかを察せよ^⑨」と。

胡安国、胡五峯の心を主とする動的傾向の強い学风はどうして成立したかといえば、北宋末から南宋初という激動期の中で、多くの人士が、あるいは仏老の異端邪説に溺れ、あるいは智術利勢の心にわざわいされて、人欲をほしいままにして天倫が滅び、中国の伝統的民族な道の哲学(聖学)が衰微したことを憂えて世に覚醒を求め、狂瀾を既倒にもどそうとしておこったものである。何故に心を主とするか、勿論謝上蔡の心をたつとぶ影響もあったが、五峯によれば「心は性情の徳に妙なる」(胡子知言三)ものであり「心の惑いが過ちであり、事の誤ちは過ちではない」

(同上)と考えられたが故に心の功夫を大切にす。さらに聖学の究極の目標である仁は、上蔡のいうが如くそれは生きてはたらく人心である(上蔡語録上)からでもあった。次に何故に静をきらい動をたつとぶか、それは伊川の「善く観るものは……却って喜怒哀楽已発の際にこれを観る」(程氏遺書一九)を直接継承するのであるが、また当時流行して一般人士を魅力していた仏教について、五峯は「釈氏はただちに曰く吾その性を見ると。故に自ら処するに静を以てして、万物の動は裁する能はず」(胡子知言一)と釈氏の見性は静で、動に欠陥があると考えたからでもある。上蔡のいうごとく「釈氏、吾儒に如かざる所以は、義以て外を方にするの一節なり。義以て外を方にするは、便ちこれ窮理。釈氏は却って理を以て障礙と為す」(上蔡語録卷下)という考えは安国、五峯と継承されたものでもあった。前述のように義以て外を方にすることを欠くような立場は、五峯によれば自私自利の立場にほかならぬ。講和と抗戦の両論がめまぐるしくかわる南宋初期の激動した時勢、本質的に功利的になった文明の中で、人々は民族的伝統的三綱五常(五峯はこれを人の本性と考える)を喪失して私利私欲に走り、打算と自らを高しとする行動の中に、真の生命(利己的な衝動から導かれた単なる生の保持ではない)の衰退化をみて、孤立的状況の中で道の哲学を説いたのである。五峯はいう「ああ世道窮まれり」(五峯集二、与樊茂実書一と。またいう「人は道に生れ、道に死す」(胡子知言二)とも。このような心の生命をたつとぶ動的な思想は、南軒に伝わり、南軒初年の思想を形成した。この思想は南軒を通じて朱子に伝わり、朱子の定説成立以前のいわゆる未定説に強い影響を与えた。朱子はその後、己発の察識を主とする湖南の知覚主義的な動の哲学と、未発の涵養に主点を置く李延平の存養主義的な静の哲学を総合止揚して動静未己発を一体としてとらえ、それを貫く工夫として敬を説き、しかも静を本とし、一方理気心性論では存在を理と氣にわけて二元論的にとらえ、心も性と情とにわけて二重構造的にとらえ、しかも氣や情よりも、理や性に重点をおく成説を確立する。かくして朱子は、胡子知言については、性無善惡説、好悪性論、天理人欲同体異用論(同行異情論には賛意を示す)仁を人心として用の立場から心をとらえている点、心を己発とし、知識(知覚)の優先主義、涵養を事としない立場を批判した。しかし一方では安国の先知後行説をほめ、安国諸子の節操をたたえ、なかならず五峯の周濂溪通書論は易うべからざるの至論と絶賛している。(以上は、朱子語類一〇一、胡子知言疑義並びに付録朱子語参照)

五峯は二程氏を啓いた周濂溪の功績を絶賛して「その功は蓋し孔孟の間に在り」（五峯集三、周子通書序）とまでいう。朱子が顕彰して、周濂溪は宋学の開祖と称せられるようになったのは周知の通りであるが、二程や程門で触れること少なかった周濂溪をかく注目した五峯の功績は見おとすことはできないであろう。南軒は乾道六年（三十八歳）知嚴州在職中、太極図説・通書を嚴陵の学官において刊刻している。朱子の太極図説解が成立するのは、それからやや経過した乾道九年夏のことであった。

〔注〕

① 張栻（一一三〇—一一八〇）字は敬夫、一の字は欽夫、南軒は号。南宋高宗の紹興三年に生まれ、孝宗の隆興、乾道、淳熙年間に活躍した思想家。病いのため在職中、任地（湖北）で歿した。享年四十八。もと広漢（四川）の人であるが、後、長沙に移り住んだ。南軒の講友には、朱子、呂東萊をはじめ、後に宰相をつとめた趙汝愚、有用の学を務めた潘時、父、浚に従学し、林艾軒、呂東萊とも親交のあった呉松年、同じく張浚門に出て朱、呂とも交遊し、陳龜川の流派に属する張杰等がいた。また陸象山の季兄陸子寿とは書問往来があり、象山も南軒には関心を持ち、南軒も陸子兄弟のことは知っていたが、象山とは遂に会う機会がなかった。南軒初年の説の範圍は、胡五峯に師事する二十九歳から、朱子の学説に同調する四十一歳（述朱質疑四にみえる夏斨の説、今一応これに従う）までを指す。朱子の成説が成立したのが南軒三十七歳の時で、胡子知言の疑義について討論するのが三十九歳の時であり、この前後から南軒の思想はゆれはじめ、やがて旧説を放下するに至る。そこでこの小論では、主として三十六、七歳までの南軒初年の思想をあらわすと思われるものについて触れた。南軒の経歴、動静の問題等については拙論「張南軒に関する二、三の考察」（文学論輯二三号九大教養部）を、また「朱子学大系第三卷、朱子の先駆（下）」（明德出版社近刊）では南軒思想を表すと思われるもの、十四篇をえらんでのせている。あわせて参照いただければ幸いである。

② 真心という語は、通行本（清刊本）や宋刊本には見えない。朱子が引用している南軒の嶽麓書院記は、あるいは南軒初出のものであったのかも知れない。とすれば、この「記」は、謝上蔡の「人は須らくその真心を識るべし。

孺子の将に井に入らんとするを見る時（に動いた心）これ真心なり（上蔡語録卷中）という語を継承するものとなろう。直接には、程子の学を基本にして、上蔡の心の生命をたつとぶ思想の影響を強く受けた胡氏湖南学の伝統を受けつぐものともいえよう。

③ 南軒文集二六、答陸子寿書。

④ 同上。

⑤ 朱子文集八七、又祭張敬夫殿撰文。

⑥ 象山全集六、与包顯道第一書。象山はつづいて「近ごろ方にかれに書を通せんと欲し、頗る論ずる所あり。今遂に恨みを抱く」と痛恨の情をあらわしている。

⑦ 南軒文集一五、送曾裘父序。

⑧ 五峰集二、与張敬夫書に「道の学、明らかならず」とあり、同、与孫正孺書（本文参照）にも「道の学は云云」という。五峰のいう道の学とは、伝統的民族な聖人の道をきわめる学、つまり聖学のことである。

⑨ 「聖希夫、賢希聖、士希賢。伊尹顔淵大賢也。……志伊尹之所志、学顔子之所学。過則聖、及則賢。不及則亦不失於令名」（志学章）「聖可学乎。曰可。」（聖学章）

⑩ 楠本正継「宋明時代儒学思想の研究」第一編第二章第一節参照。

⑪ 宋元学案卷一、安定学案卷二、泰山学案参照。

⑫ 鶴林玉露一

⑬ 朱子文集九六下、張浚行状所引。

⑭ 宋元学案四四、趙張学案、全祖望序録。

⑮ 同三四、武夷学案、祖望序録。

⑯ 五峰集二、与曾古甫書。

⑰ 五峰集一、簡彪漢明。

⑱ たとえば、四庫提要二七、春秋類二、春秋伝三十卷の項が一例。

- 19 胡致堂の先公行状。
- 20 宋元学案三四、武夷学案、胡氏伝家録所引。
- 21 先公行状。
- 22 同上。
- 23 春秋胡氏伝序。
- 24 楠本博士の前揚書。第一編、第四章、第二節、湖南学の項参照。
- 25 同上、並びに岡田武彦博士の「胡五峰論（上・下）―湖南学と朱子―」（東洋文化復刊第十・十一号）参照。
- 26 武夷学案、王梓材案語。
- 27 朱子語類八三。
- 28 このような態度は、五峰を経て、南軒に受けつがれている。たとえば、南軒の朱子宛の書簡（第二書及び第二五書）で、朱子の辞受の際に疑問を呈している。
- 29 上蔡の安国評、次の許翰の安国評はともに胡致堂の先公行状に引く。また宋元学案、武夷学案参照。
- 30 以上の安国の略歴と行実は、先公行状による。
- 31 宋元学案九六、元祐党案参照。
- 32 朱子語類百三十一、本朝五、中興至今日人物上、李趙張汪黃秦参照。
- 33 伊洛淵源録新增一三、胡文定公、楊廉按語。
- 34 安国は師友の交わりをなした遊鷹山の推薦によって秦桧を識った。秦桧については、おおむね悪評が多いが、外山軍治氏の「岳飛と秦桧」（一九三九、富山房）は、南宋初期、和平と抗戦との両論が行なわれて激動が続いた中で、金、宋両国の力関係の評定して和平を断行した秦桧を有能な政治家と位置づけ、幾分同情的見方を示している。
- 35 五峰集二、与秦会之書。
- 36 四庫提要百五十七、集部十、別集類十、五峰集五卷の項にいう。「又有与秦桧一書。自乞為嶽麓書院山長。蓋桧与宏父安国交契最深。故力汲引之。宏能肅然自遠。蟬蛻於權利之外。其書詞婉而意嚴。視其師楊時委曲以就蔡京者。

可謂青出於藍、而冰寒於水矣」ちなみに五峯は「伯夷は性命の情を全うす」（知言三）と尊ぶ。

③7 朱子が父事し師事していた胡籍溪の出処進退に疑問を抱いて作った諷刺詩（隱遁志向的趣向に富む）を見て、五峰は門人南軒に「この詩は体があって用がない」と話し、後にそれが朱子に伝わり、朱子は五峰に会って問うことができなかったのを残念に思い、五峰の深意を忘れないためにこれを書きしるした（朱子文集八一、胡子知言疑義附録参照）と述べている。これらについては、楠本、岡田両博士の前掲書に詳論されているのを参照。

③8 たえば程門の王震沢の「仏氏は道の体を実見するも、途轍（方法論）にたがいおわる。故にともに堯舜の道に入るべからず」という本同末異説を五峯は引用して批判する。（五峰集二、与曾吉甫第一書）

③9 胡子知言一、天命に「陰陽之升降。邪正之内外一也。是故仁者。雖切切於世。而亦不求之必行也」とある。

④0 たしかに五峯は「善を見て明ならざれば、則ちこれを守ること固からず云云」（胡子知言一、天命）といつて、いわゆる仁智の合一を説いてはいる。しかし、それと同時に「仁之一義、聖学要道。直復分明見得。然后別居而安。只于文学上見。不是了。須於行持坐臥上見。方是真見也。（五峰集二、与孫正孺書）ともいう。相即一貫なものとしつつ、等価と考えない思惟構造をもつといえよう。彼の天理人欲論も同じ構造をもつといえる。いわば連続でありつつ非連続な面も識別するという考え方であろう。

④1 南軒が五峯に学んで、更に純粹になり、平正に帰した功については宋元学案五〇、南軒学案で黄宗羲が述べている。

④2 錢穆「宋明理学概述、二二、張栻」によると、南軒が若年の頃、五峰に会おうとしたが、五峰は病氣と称して会わなかった。そして人に告げて「彼の家は仏を学ぶもの。私が彼に会うなんてどうかしている」といった。南軒はそれを聞いて始めて会見を拒否された理由を知り、再び謁を請うたが、語甚だ契合し、遂に業を受けたというエピソードをのせている。希顔録編纂はこのエピソードと関係があるのかも知れない。

④3 胡子知言序、また前述の嶽麓書院記、孟子講義序等は全文が「朱子学大系第三卷朱子の先駆（下）張南軒」（明徳出版社、近刊）の中に採録されているので参照されたい。

④4 南軒文集答朱元晦秘書第二十八書、第三十六書、第三十八書、第六十六書等を参照。

④ 朱、張、呂三人による五峰の心性論、天理人欲論等に関する疑義については岡田博士前掲論文に詳論してあり、ここでは触れない。

⑤ 南軒のこの説については朱門でも問題になり、しばしばとりあげられている。朱子もこの説を基本的には認める立場であるが（朱子語類五）しかし、「天下の事は皆我の当に為すべき所の者なるも、ただかくのごとく強信するを得ず。須く学んで那の田地に到り、経歴磨鍊すること多くするを ちて後、方めて信じ得過ぎん」（朱子語類十 七）と漸進を強調して頓悟を戒めている。

⑥ 南軒文集五、廬陵……三歎詩。

⑦ 同十五、送劉圭父序。

（付記） 小論は、昭和五十年度文部省科学研究費「北宋期における思想と文学の変遷とその交流」（代表者、九州大学文学部荒木見悟教授）に参加して得られた成果の一部である。なお、小論は昭和五十年十二月十四日、同研究集会において「張南軒初期思想についての二、三の考察」として発表したものを骨子としている。（五一、七）